

2021年

6月第1・2週の礼拝説教要約

・ 6月6日：マルコ福音書2：5-12

「起きて歩く時」

・ 6月13日：マルコ福音書2：13-17

「招かれる者」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

ガリラヤ湖畔のカファルナウムといえば、成人したイエスが親元を離れて独立して住んだ町です。両親や兄弟姉妹と過ごしたナザレが故郷なら、カファルナウムはイエスご自身の町と表現されます。ガリラヤ湖で漁をする漁師の町でもありました。その日、イエスは自身の家において、その噂を聞いた近隣の人々がそこに押し掛けて来ます。安息日なら、会堂で人々に語りかけるところですが、その日は平日だったようです。語られた話の内容は残念ながら記録されていませんが、イエスの話が中断させられるところから始まるエピソードが中心の話題となります。

噂を聞いて、後からその場に押しかけたグループが体の麻痺が治せない寝たきりの男性を伴ってイエスに面会を求めて来たのです。ところが人混みに押し戻されて中には入れず、止むを得ず家の上にのぼり、屋根を剥がしてそこから男性をつり下ろします。たまたまその場に居合わせた律法学者達は、この強行手段が既に常軌を逸しており無罪では済まされぬことを察知します。すると、家主のイエスは意外にもこれを咎めることなく、つり下ろされた男性に向かってこう語りかけました。「あなたの罪は赦される」。ナザレのイエスの実家は大工です。その業を受け継ぐ者ならば屋根の修理くらいはお手の物です。

すると、人々の目が今度は言葉の主のイエスに注がれます。律法学者達もイエスの発言に驚愕します。屋根の破損など一切、気にもかけぬ家主イエスが、彼らの強行手段を、受け流すばかりか、同時に「罪を赦す」ことまでしたからです。不治の病を患う者が、何らかの理由で罪を負う者でもある可能性を因果律によって証明しようとする試みは、古代社会には共通にあり、この場合、患者の症状だけに限定して対応する術はありません。ところがイエスは、その場で男性の罪責の全てを一方的に無に帰したのです。

イエスの言葉を耳にした律法学者達は、これが越権行為であるとともに神をも冒瀆する発言であることを重くみます。罪の赦しは神の専権事項であるはずだと、心の中で叫んでいます。

突然屋根から吊り下ろされた男性よりも、今度はイエスの発言の方がはるかに問題視され始めているその時に、イエスは彼らの心中を読んでこう付け加えます。「この人に、あなたの罪は赦されたと言うのと、起きて床を担いで歩け、と言うのとどちらが易しいか。」と。イエスはこの場で男性の身代わりに十字架を背負っているに等しいのです。

さて、この重苦しい沈黙はイエスのさらなる一言によって破られる時、が来ます。イエスは男性に向かって、「あなたに言う、起きて床を担ぎ、家に帰りなさい。」すると、その人は言われるが儘に、歩いてその場から立ち去ります。造り主なる神は、その人の麻痺を癒し起き上がらせ、あるべき姿にととのえて、社会の中へと送り出したのでした。

さて、五体満足で社会生活を送る者の中にも、神の赦しを請うべき者の姿がありました。徴税人です。罪を患う病人ではなく、健康な罪人としても定義しましょう。言葉遊びではありません。これは、イエスの言葉の中にあるものと、相通ずる表現です。すなわち「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく、病人である。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」という言葉です。その罪人とは社会に復帰すべき人間ではなく、すでに社会に参加している人々です。彼らが普通の家に住み、堂々と客を招き、会食をする費用は、もちろん彼らの稼ぎの中から賄われます。その日、ガリラヤ湖の畔にいたのは、おそらく通行税を徴収する徴税人で、その名をレヴィといいました。私に従いなさいというイエスの呼び掛けに、直ちに従ったのがこの人で、後日、彼はイエスを自宅に招き入れ、多くの仲間と共に食事をします。招待された者の中には、腐れ縁のファリサイ人や律法学者もいて早々に立ち去ろうとしていたときに、その場で和気藹々と会食しているイエスの姿が目に入ります。「(こんな所に、来ていたのか・・・、しかも腰を据えて、楽しそうに罪人らと語り合うとは・・・)」そう、イエスを招いたこの家主こそが、イエスの弟子になったばかりの徴税人レヴィでした。ローマ帝国の支配の下で、庶民から血税を巻き上げている罪人の頭(?!!)の一人で、ユダヤ人からは忌み嫌われておりました。しかし、彼もイエスに救われ、悔い改めて、その後、不正から遠ざかっていた社会人の一人だったのです。